松崎六本松遺跡４

小郡市文化財調査報告書第３４９集

２０２２

小郡市教育委員会

<序　文>

本書は、小郡市教育委員会が令和２年度に実施した松崎六本松遺跡４の発掘調査の記録です。今回の発掘調査では、奈良時代の官道が 100 mにわたり検出されました。小郡市と大刀洗町の大部分は奈良時代の御原郡にあたり、その郡衙の変遷が明らかになっており、いずれも小郡官衙遺跡群小郡官衙遺跡・上岩田遺跡、大刀洗町下高橋官衙遺跡として国指定史跡となっています。今回発見された官道はこの御原郡内の主要施設を結ぶものです。

こうした埋蔵文化財は、地域の歴史を知る上で欠かすことのできない文化遺産であり、現地見学会も実施して、皆様にその成果を実際に見ていただきました。

調査にあたりましては、関係諸機関、周辺住民の皆様、そして現地作業にあたった地元作業員の皆様などご理解とご協力をいただきました。記して感謝を申し上げ、序文といたします。

令和４年３月 31 日

小郡市教育委員会
教育長　秋永　晃生

<例　言>

1．本書は、令和２年度に行った小郡市松崎に所在する「松崎六本松遺跡４」の発掘調査記録である。

2．発掘調査は、株式会社　伸斉の委託を受けて、小郡市教育委員会が実施した。

3．調査期間は、令和２年 12 月 16 日から令和３年３月 26 日まで実施した。調査面積は 2217㎡である。

4．遺構の実測は山田桃子と三津山靖也、山崎頼人が実施し、遺物の実測は林知恵が行い、デジタルトレースは、宮崎美穂子が行った。遺物の洗浄・接合は佐々木智子・永富加奈子・山川清日・牛原真弓が行い、遺物の写真撮影は（有）システム・レコに委託した。

5．本書中の方位は座標北を示し、図上の座標は国土座標第Ⅱ系 (世界測地系) に拠る。

6．本書で用いた標高は、東京湾平均海水面（T. P.）を基準とした。

7．本書で用いた略号は、溝状遺構：ＳＤ　土坑：ＳＫ　である。

8．遺物・実測図・写真は、小郡市埋蔵文化財調査センターにて保管・管理している。

9．本書の執筆は山田桃子と山崎頼人が行い、編集は山崎が行った。

＜目　次＞

第１章　調査の経過と組織 …… 1
1．調査に至る経緯 …… 1
2．調査の経過 …… 1
3．調査組織 …… 1

第２章　位置と環境 …… 2

第３章　調査の成果 …… 4
1．調査の概要 …… 4
2．基本層序 …… 4
3．Ⅰ区の調査 …… 4
（1）溝状遺構
（2）ピット群
4．Ⅱ区の調査 …… 5
（1）道路状遺構（官道）
（2）溝状遺構
（3）そのほかの出土遺物

第４章　調査成果の分析 …… 18

<挿　図・表　目　次>

第１図　松崎六本松遺跡周辺の既往調査（ｓ＝１/27,500）

第２図　松崎六本松遺跡既往調査区位置図（ｓ＝１/5,000）

第３図　道路状遺構側溝断面実測図１[ベルト①～④]（ｓ＝１/60）

第４図　道路状遺構側溝断面実測図２[ベルト⑤～⑧]（ｓ＝１/60）

第５図　道路状遺構側溝遺物出土状況実測図[土器①～③、石器④]（ｓ＝１/40）

第６図　道路状遺構側溝遺物出土状況実測図[土器⑤～⑧]（ｓ＝１/40）

第７図　道路状遺構側溝遺物出土状況実測図[土器⑨～⑪]（ｓ＝１/40）

第８図　道路状遺構側溝出土土器実測図（ｓ＝１/２）

第９図　松崎六本松遺跡４出土石器・鉄器実測図（ｓ＝１/２）

第10図　道路状遺構［北部］実測図（ｓ＝１/50）

第11図　松崎六本松遺跡１～４合成図（ｓ＝１/1,200）

付　図　松崎六本松遺跡４全体図（ｓ＝１/200）

第１表　松崎六本松遺跡４出土遺物観察表

<図　版　目　次>

図版表紙　松崎六本松遺跡４全景（南上空から花立山・宝満山方向）

図版１　①松崎六本松遺跡４調査区全景（東上空から基肄城・背振山系方向）
②松崎六本松遺跡４調査区全景（北上空から下高橋官衙遺跡・高良山方向）

図版２　①松崎六本松遺跡４調査区全景（真上から）
②松崎六本松遺跡４調査区（南東上空から）

図版３　①松崎六本松遺跡４官道検出状況（真上から）
②松崎六本松遺跡４官道検出状況（北東上空から）

図版４　①松崎六本松遺跡４官道検出状況（南上空から）
②松崎六本松遺跡４官道検出状況（北上空から）

図版５　①Ⅰ区調査区全景（南西から）　②Ⅰ区調査区全景（北東から）
③Ⅰ区南壁SD01 土層断面（北東から）　④Ⅰ区 SD02・03 掘削状況（北西から）
⑤Ⅰ区SD04・05 出土状況（東から）　⑥Ⅰ区 SD06 土層断面（北から）
⑦Ⅰ区南壁官道東側溝土層断面（北から）　⑧Ⅰ区官道東側溝（ベルト①）土層断面（南から）

図版６　①官道掘削状況［ベルト①～ベルト③付近］（北から）
②官道西側溝土層断面［ベルト②］（南から）　③官道東側溝土層断面［ベルト②］（南から）
④官道西側溝土層断面［ベルト③］（北から）　⑤官道東側溝土層断面［ベルト③］（北から）

図版７　①官道掘削状況［ベルト④⑤付近］（北から）
②官道西側溝土層断面［ベルト④］（北から）　③官道東側溝土層断面［ベルト④］（北から）
④官道西側溝土層断面［ベルト⑤］（北から）　⑤官道東側溝土層断面［ベルト⑤］（北から）

図版８　①官道掘削状況［ベルト⑥付近］（北から）
②官道土層断面［ベルト⑥トレンチ］（北から）　③官道土層断面［ベルト⑥トレンチ］（北から）
④官道西側溝土層断面［ベルト⑥］（北から）　⑤官道東側溝土層断面［ベルト⑥］（北から）

図版９　①官道掘削状況［ベルト⑥⑦付近］（北から）
②官道西側溝土層断面［ベルト⑦］（南から）　③官道東側溝土層断面［ベルト⑦］（南から）
④官道西側溝土層断面［ベルト⑧］（南から）　⑤官道東側溝土層断面［ベルト⑧］（南から）

図版10　①官道北壁土層断面（南から）　②官道北壁土層断面（南西から）

図版11　①官道西側溝土層断面［北部］（南東から）　②官道西側溝土層断面［北部］（東から）
③官道東側溝土層断面［北部］（南西から）　④官道東側溝土層断面［北部］（西から）
⑤官道西側溝使用底面［北壁］（北から）　⑥官道東側溝使用底面［北壁］（北から）
⑦官道西側溝使用底面［北部］（南から）　⑧官道西側溝使用底面［北部］（南から）

図版12　①官道西側溝土層断面［北部］（北東から）　②官道西側溝土層断面［北部］（東から）
③官道西側溝土層断面［北部］（北西から）　④官道西側溝土層断面［北部］（南東から）
⑤官道東側溝使用底面［北部］（南西から）　⑥官道東側溝使用底面［北部］（北西から）
⑦官道東側溝使用底面［北部］（西から）　⑧官道東側溝使用底面［北部］（東から）

図版13　①官道西側溝掘削痕［中央部］（真上から）　②官道東側溝掘削痕［中央部］（真上から）
③官道西側溝土器①出土状況（南から）　④官道西側溝土器⑥出土状況（南から）
⑤官道東側溝土器⑦出土状況（北東から）　⑥官道東側溝土器⑦出土状況詳細（東から）
⑦官道東側溝土器⑩出土状況（南東から）　⑧官道東側溝土器⑩出土状況詳細（真上から）

図版14　松崎六本松遺跡４出土土器①

図版15　松崎六本松遺跡４出土土器②　石器　鉄器

第１章　調査の経過と組織

１．調査に至る経緯

松崎六本松遺跡４の発掘調査は、小郡市松崎字六本松 202、204、210、214、234 － 1、234 － 2、236、238、239、240 － 1、245 における物流倉庫建設に先立ち、株式会社仲斉より令和２年５月 21 日付で小郡市教育委員会に対して埋蔵文化財の有無に関する照会 (審査番号 20022) が提出されたことに始まる。市教委では、これを受けて令和２年５月 28 日に申請地の試掘調査を行った結果、地表下約 30㎝の深さで遺構が確認されたため、開発に先立って埋蔵文化財に関する協議を行った。協議の結果、敷地のうち倉庫建設部分の 2,217㎡について発掘調査を実施することになり、令和２年 10 月 22 日付けで委託契約を締結した。

２．調査の経過

発掘調査は令和２年12月15日から令和３年３月26日にかけて実施した。主な調査の経過は以下のとおりである。

令和２年12月15日	重機による表土剥ぎ開始。
12月17日	発掘作業員を投入し、Ⅱ区南側から遺構検出。
12月21日	Ⅰ区 SD01 掘削。
令和３年１月18日	Ⅰ区全体図作成。
１月20日	Ⅱ区遺構検出。
１月28日	調査成果について記者レク。
２月３日	道路側溝掘削前にドローン撮影（基山町主税氏・坂井氏協力)。
２月４日	道路側溝掘削開始。
２月９日	NHK による取材。
３月４日	全体空撮。3D 計測（筑後市永見氏協力)。
３月13日	現地説明会開催。
３月26日	調査終了。埋め戻しはせずに明け渡し。

３．調査組織

松崎六本松遺跡４の調査の体制は以下の通りである。

［令和２年度調査　令和３年度整理作業］

小郡市教育委員会　教 育 長　秋永　晃生
教育部長　山下　博文（令和２年４月から）
文化財課　課長　柏原　孝俊
係長　杉本　岳史
技師（会計年度任用職員）山田　桃子［調査・報告書作成担当］
技師　一木　賢人［調査担当］
技師　山崎　頼人［調査・報告書作成担当］

第２章　位置と環境

小郡市は、福岡県のほぼ中央に位置し、北東部には独立した山地である花立山 (標高 130．6m) が、北西部には脊振山系から延びる低丘陵 (三国丘陵) が存在する。小郡市の西側では佐賀県鳥栖市と基山町に接し、南北を縦断するかたちで国道３号線、九州自動車道、JR 鹿児島本線、西鉄天神大牟田線が走っている。また、東西には大分自動車道、国道 500 号線が走っているなど、現在も交通の要衝地となっている。

今回報告する松崎六本松遺跡は、小郡市を南流する宝満川の東側の低位段丘上に位置する。

奈良時代において、当地域は筑後国御原郡に属する。御原郡は「大宰府」の南西にあり、有明海に通じる筑紫平野の最奥に位置する要衝の地である。『和名抄』によると古代の御原郡は「長栖」、「日方」、「板井」、「川口」の四郷が知られるが、「日方」は小郡市干潟、「板井」は小郡市大板井・小板井にそれぞれ遺称地を残すがほかの二郷は知られていない。

古墳時代には、三国丘陵域での集落や墳墓の展開が顕著であったが、７世紀以降となると、丘陵上の集落は規模を縮小し、段丘上に立地する集落が増加する傾向がみられ、併せて個々の集落規模が大規模化する特徴がみられる。それには、官衙関連遺跡が段丘上に展開することが大きく影響している。

官衙遺跡では、小郡市上岩田遺跡、小郡官衙遺跡、大刀洗町下高橋官衙遺跡が知られ、評から郡への移り変わりが明らかとなっている。また、近年では、松崎六本松遺跡の調査成果をはじめ、それらの諸施設を結ぶ官道の存在が明らかになっている。上岩田遺跡周辺や小郡官衙遺跡付近など、官道や官衙周辺での遺跡展開が顕著となっていることがわかる（第１図）。

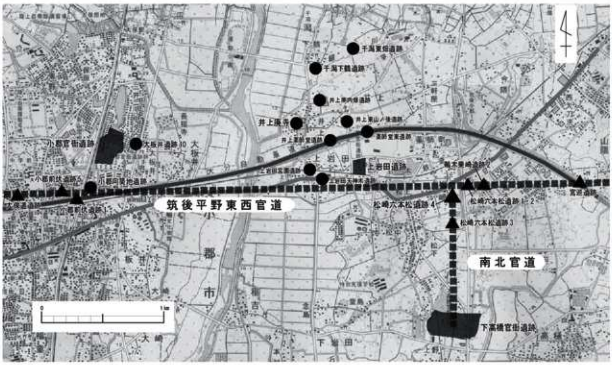
東西の官道（筑後平野東西官道）は松崎六本松遺跡１・２次調査のほか、宮巡遺跡 (大刀洗町)、向榮地遺跡、小郡前伏遺跡５、小郡大保道遺跡で道路状遺構や片側の側溝部分が確認されている。道路状遺構の規模は幅６ｍ前後、側溝幅は 0.5 ～ 0.6 ｍ前後で、側溝から出土する土器は８世紀代を中心とする。

今回の調査で確認された約 100m に及ぶ南北に延びる官道は、当遺跡の南に位置する下高橋官衙遺跡へ向かうもので、松崎六本松遺跡３や下高橋馬屋元遺跡６・７で確認された道路状遺構とつながるものと考えられる。

以上のように、当地域は古代御原郡の官衙遺跡の変遷やそれらを結ぶ官道が明らかとなっている。それらは条里地割とも整合し、御原郡における広範な都市計画のなかで、一般集落にも変化がみられるのかといった視点も重要であろう。地方における律令体制の成立・展開やそれにともなう在地社会の変容や地方末端支配機構の内実を検討できるフィールドである。

【参考文献】

・小郡市教育委員会『松崎六本松遺跡』小郡市文化財調査報告書第 188 集　2004
・小郡市教育委員会『松崎六本松遺跡２』小郡市文化財調査報告書第 246 集　2009
・小郡市教育委員会『松崎六本松遺跡３』小郡市文化財調査報告書第 331 集　2020



第１図　松崎六本松遺跡周辺の既往発掘調査区（ｓ＝１/27,500）

第２図　松崎六本松遺跡既往調査区位置図（ｓ＝１/5,000）

第３章　調査の成果

１．調査の概要

本遺跡はこれまでに３次の調査を実施している。１・２次調査では筑後平野を東西に走る幅６ｍの直線をなす道路状遺構（官道）が確認された。３次調査では南北に走る幅６ｍの直線をなす道路状遺構(官道)が確認され東西方向の道路状遺構(官道)に直交するものと考えられる。今回の調査は３次調査の北側の調査区で、３次調査から続く南北方向の道路状遺構(官道)を100ｍ分検出した。

その他にも、道路状遺構を切る溝や土坑を検出したが、近代以降の所産である。

２．基本層序

Ⅱ区北側壁面で基本層序および道路状遺構の形成について確認した（第10図）。Ⅱ区は道路状遺構に沿う形で設定した調査区で、南北約100ｍ、東西12～13ｍの調査区である。調査区南端から北へ60ｍ付近で検出面（黄褐色ローム土）の標高が18.6ｍと高くなっており、南端では17.9ｍ、北端では18.2ｍと下がっていく様子がうかがえる。

ただし、本来の遺構面は黄褐色ローム土の上に３層分堆積した土があり、北壁では本来の遺構図は50㎝程度上位になると土層観察から窺えた（第10図）。地形が低くなる部分では旧表土である黒色シルトも分厚くなっていると思われ、その黒色土（旧表土）から溝の掘削が始まっている。

現況地盤から70㎝下まで造成土が確認でき、その下層に床土がみられた。もともとは水田や畑に使用されていた土地が造成され耕作土が削平され、客土がみられる。

その下層には旧表土である黒色シルトが30～50㎝堆積している。道路状遺構の側溝はこの黒色土層、もしくは田畑造成によって失われた、さらに上層から掘削されていることが窺える。

旧表土以下には火山ｶﾞﾗｽを含む暗褐色土（アカホヤ火山灰の可能性）がみられ、その下層に黒褐色粘質土、にぶい黄橙色粘質土がみられた。

調査区の南半分では、松崎六本松遺跡１・２でも見られた、基盤となる下位の淡黄褐色粘質土の上位にブロック土混入の灰黄褐色土が形成されている。層準的には旧表土（黒色シルト）の下層に相当すると考えられ、やや低湿な状況で植物等によって攪拌された状況なのであろうか。北壁の火山ｶﾞﾗｽを含む暗褐色土が攪拌された状況とも考えられる。この灰黄褐色土は道路造成時の整地層であることも考慮してトレンチ等を設定したが（第４図）、松崎六本松遺跡２次調査で確認した道路側溝に切られた風倒木痕と灰黄褐色土との関係から、灰黄褐色土の堆積後に倒木痕の形成、道路側溝の掘削という大きな変遷が確認されている。

今回の調査でも、直接的ではないが、北壁土層観察の結果とあわせて、道路状遺構とは関係のない堆積層であることが考えられた。

３．Ⅰ区の調査

（１）溝状遺構

１号溝（付図）

Ⅰ区南側で検出した北東―南西方向の溝である。その延長は調査区外に及ぶ。北側は標高18.1ｍ、南側は標高17.8ｍで検出した。幅1.2ｍ、深さ30㎝程度を測る。埋土は黒褐色を呈し、近世以降の陶磁器片、ガラス片を含む。

２号溝（付図）

Ⅰ区中央付近で検出した北西―南東方向に延びる溝である。３号溝と併行して走る。その延長は調査区外に及び、北西側はⅡ区でその延長を確認した。標高17.8ｍで検出した。幅60㎝、深さ５～10㎝程度を測る。埋土は黒褐色を呈し、近世以降の陶磁器片を含む。

３号溝（付図）

Ⅰ区中央付近で検出した北西―南東方向に延びる溝である。２号溝と併行して走る。その延長は

調査区外に及び、北西側はⅡ区でその延長を確認した。標高18.1 mで検出した。幅80cm、深さ15～25cm程度を測る。埋土は黒褐色を呈し、近世以降の陶磁器片、瓦片、ガラス片を含む。

4号溝（付図）

Ⅰ区北端で検出した北西―南東方向に延びる溝である。4号溝と併行して走る。その延長は調査区外に及ぶがⅡ区ではその延長は確認できない。標高18.1 mで検出した。幅60cm、深さ25cm程度を測る。埋土は黒褐色を呈し、近世以降の陶磁器片、瓦片を含む。

5号溝（付図）

Ⅰ区北端で検出した北西―南東方向に延びる溝である。5号溝と併行して走る。その延長は調査区外に及ぶがⅡ区ではその延長は確認できない。標高18.1 mで検出した。幅60～70cm、深さ25cm程度を測る。埋土は黒褐色を呈し、近世以降の陶磁器片を含む。

6号溝（付図）

Ⅰ区中央東端で検出した北東―南西方向に延びる溝である。1・2号溝に切られている。標高18.1 mで検出した。幅60cm以上、深さ5～10cm程度を測る。埋土は黒色～灰褐色を呈す。

（2）ピット群

Ⅰ区北側のSD0203とSD0405間では大小のピット群を多く検出した（付図）。特に、SD0203とSD0405間の中央部分にはそれらの溝と同じ方向で並ぶピット列が確認できる。埋土は灰褐色土で、すべてを掘削していないが、掘削したピットでは深さが20～30cm程度のものが多い。

Ⅰ区で検出した遺構は、近世以降近代までを中心としたものと考えられ、現在の地割以前の斜方位を取る地割を示していると考えられる。

4．Ⅱ区の調査

（1）道路状遺構（官道）

道路跡と認識される遺構は、側溝と側溝との芯心間の距離が6.2～6.4 mである。総延長約100 m分を検出した（付図）。ほぼ真北方向とるもので側溝敷設型の道路状遺構である。路面自体は北壁面の観察から近年の造成土や田圃形成時に削平を受けており、確認できなかった。調査区近辺には、道路状遺構と同一時期の遺構は確認できなかった。

側溝は詳細に見ると、直線ではなく、緩やかな屈折が連続して観察できる。数メートル単位の溝状土坑を掘り込んで最終的に連結して一つの溝としている。一旦深く掘削した後に、溝底を均一にならすために、黄褐色粘土ブロックを含む層で埋めている。住居でいう貼床状の土が堆積している部分がある。なお、今回調査した道路状遺構の北側10 m分の東西側溝は最終底面（溝掘り込み時の底面）までの掘削は行わずに、溝使用時の底面までの掘削に留めて詳細を観察した。同様にⅡ区の南側拡張区の調査も溝使用時の底面までの掘削としている。

道路状遺構の土層断面は残りの良い部分を選択し、9か所で観察した。ベルト⑤⑥部分では最終的にトレンチを入れて、道路状遺構下層の状況も観察した。それぞれの土層断面について説明する。

ベルト①（付図、第3図）

ベルト①は調査区南端のⅠ区とⅡ区が重なる箇所にあたり、検出した道路状遺構の南端部分にあたる。道路状遺構検出面は標高17.8 m、側溝の芯心間の距離は6.3 mである。

［西側溝］

西側溝の土層断面実測は行っていない。西側溝は使用時の底面までの掘削である。上端幅84cm、底面幅42cm、使用時の底面までの深さ39cmを測る。溝の断面形は逆台形状である。掘り込み時の底面までは、黄褐色粘土ブロックと黒褐色粘土ブロックが混じった溝施工時の均し土がみられる。使

用時の底面の標高は 17.49 mである。

［東側溝］

Ⅰ区調査時に東側溝の土層断面を観察した。東側溝は溝掘り込み時の最終底面まで掘削している。上層は水田耕作土によって大きく削平を受けており残りは良くない。上端幅 60cm、底面幅 54cm、深さ 18cmの残存である。溝の断面形態はU字形で壁の立ち上がりが比較的強く、溝底付近の形状をよく残している。なお、底面から 12cmの厚さで黄褐色粘土ブロックを多く含む溝施工時の均し土がみられる。その上層には溝埋土の黒色シルトが堆積している。使用時の底面の標高は 17.67 m、掘り込み時の底面の標高は 17.55 mである。

ベルト②（付図、第3図）

ベルト②は開発計画の設計変更により、調査区を拡張した部分にあたる。路面の検出に留意して道路側溝が検出できる直前に機械掘削を留め、人力掘削で検出面まで下げた。しかし、耕作によって削平を受けており、路面は削平されていた。また、拡張区では、側溝の掘削を使用時の底面までとして掘削痕や掘削単位を観察することに努めた。道路状遺構検出面は 17.9 m、側溝の芯心間の距離は 6.42 mである。

［西側溝］

使用時の底面までの掘削である。上端幅 78cm、底面幅 34cm、使用時の底面までの深さ 36cmを測る。溝の断面はラッパ状に大きく開いている。埋土は黒色～黒褐色シルトを主体に下層では淡黄色土をわずかに含んでいる。使用時の底面の標高は 17.66 mである。

［東側溝］

使用時の底面までの掘削である。幅 78cm、使用時の底面までの深さ 54cmを測る。溝の断面はやや開きのあるU字形で壁の立ち上がりが比較的強い。埋土は黒色シルトを主体に明黄褐色土をわずかに含んでいる。使用時の底面の標高は 17.54 mである。

ベルト③（付図、第3図）

ベルト③は当初の調査区南端にあたる。道路状遺構の軸と直交していないが、道路状遺構の上層部分の観察も出来ることから記録を取った。道路状遺構検出面は 18.0 mである。

［西側溝］

溝掘り込み時の最終底面まで掘削している。上端幅 72cm程度、底面幅 48cm、使用時の底面までの深さ 42cmを測る。溝の断面はやや開きのあるU字形で壁の立ち上がりがやや強い。埋土は黒色シルトを主体とし、底面から 10cmの厚さで黄褐色粘土ブロックを多く含む溝施工時の均し土がみられる。使用時の底面の標高は 17.56 m、掘り込み時の底面の標高は 17.46 mである。

［東側溝］

溝掘り込み時の最終底面まで掘削している。上端幅 75cm程度、底面幅 54cm、使用時の底面までの深さ 21cmを測る。溝の断面はやや開きのあるU字形で東壁よりも西側壁の立ち上がりが緩やかである。埋土は黒色シルトを主体とし、下層では褐色粘質土ブロックをわずかに含む。底面から 10cmの厚さで黄褐色粘土ブロックを多く含む溝施工時の均し土がみられる。使用時の底面の標高は 17.77 m、掘り込み時の底面の標高は 17.67 mである。

ベルト④（付図、第3図）

ベルト③から北へ約 11 m地点での土層観察である。道路状遺構検出面は 18.05 m、側溝の芯心間の距離は 6.15 mである。

［西側溝］

溝掘り込み時の最終底面まで掘削している。上端幅 54cm、底面幅 35cm、使用時の底面までの深さ 35cmを測る。溝の断面はやや開きのあるU字形である。埋土は黒色粘質土を主体とする。底面から 7cmの厚さで黄褐色粘質シルトを含む溝施工時の均し土がみられる。使用時の底面の標高は 17.69 m、掘り込み時の底面の標高は 17.76 mである。

［東側溝］

溝掘り込み時の最終底面まで掘削している。上端幅 48cm、底面幅 36cm、使用時の底面までの深さ 20cmを測る。溝の断面はＵ字形で壁の立ち上がりは比較的強い。埋土は黒褐色粘質土を主体とする。底面から 12cmの厚さで、にぶい黄色～黄褐色粘質土ブロックを含む溝施工時の均し土がみられる。使用時の底面の標高は 17.79 m、掘り込み時の底面の標高は 17.67 mである。

ベルト⑤（付図、第４図）

ベルト③から北へ約 16 m地点での土層観察である。ベルト⑤部分は最終的にトレンチを入れて、道路状遺構下層の土層断面も観察した。道路状遺構の下層には、いわゆる地山であるにぶい黄褐色粘質土～砂混じりの粘質土の上層に、にぶい黄褐色粘質土ブロックと黒褐色粘質土ブロックが混じる層がみられた。この撹拌を受けている土層の解釈は難しいが、人為的な盛土・成形に伴うものではないと考える。道路状遺構検出面は 18.1 m、側溝の芯心間の距離は 6.3 mである。

［西側溝］

溝掘り込み時の最終底面まで確認している。上端幅 48cm、底面幅 28cm、使用時の底面までの深さ 15cmを測る。溝の断面はやや開きのあるＵ字形である。埋土は黒色シルトを主体とする。底面から 9cmの厚さで黄褐色粘質土を含む溝施工時の均し土がみられる。使用時の底面の標高は 17.9 m、掘り込み時の底面の標高は 17.81 mである。

［東側溝］

溝掘り込み時の最終底面まで確認している。上端幅 66cm、底面幅 36cm、使用時の底面までの深さ 30cmを測る。溝の断面は開きのあるＵ字形で西壁は階段状に立ち上がる。埋土は黒色シルトを主体とする。底面から 9cmの厚さで、にぶい黄褐色粘質土ブロックを含む溝施工時の均し土がみられる。使用時の底面の標高は 17.8 m、掘り込み時の底面の標高は 17.71 mである。

ベルト⑥（付図、第４図）

ベルト③から北へ約 33.5 m地点での土層観察である。ベルト⑥部分は最終的にトレンチを入れて、道路状遺構下層の土層断面も観察した。道路状遺構の下層には、いわゆる地山であるにぶい黄褐色粘質土～砂混じりの粘質土の上層に、にぶい黄褐色粘質土ブロックと黒褐色粘質土ブロックが混じる層がみられた。この撹拌を受けている土層の解釈は難しいが、人為的な盛土・成形に伴うものではないと考える。道路状遺構検出面は標高 18.2 m、側溝の芯心間の距離は 6.3 mである。

［西側溝］

溝掘り込み時の最終底面まで掘削している。上端幅 48cm、底面幅 33cm、使用時の底面までの深さ 13cmを測る。溝の断面は逆台形状である。埋土は黒色シルトににぶい黄褐色土を少し含む。底面から 12cmの厚さでにぶい黄褐色粘質土ブロックを含む溝施工時の均し土がみられる。使用時の底面の標高は 18.1 m、掘り込み時の底面の標高は 17.98 mである。

［東側溝］

溝掘り込み時の最終底面まで確認している。上端幅 55cm、底面幅 33cm、使用時の底面までの深さ 30cmを測る。溝の断面はＵ字形で壁の立ち上がりは比較的強く、東壁は階段状に立ち上がる。埋土は黒色シルトを主体とする。底面から 8cmの厚さで、にぶい黄褐色粘質土ブロックを含む溝施工時の均し土がみられる。使用時の底面の標高は 17.92 m、掘り込み時の底面の標高は 17.84 mである。

ベルト⑦（付図、第４図）

ベルト③から北へ約 52.3 m地点での土層観察である。ベルト⑦は調査区内では旧地形が高い箇所で、その北側では削平を受けて側溝が途切れている。道路状遺構検出面は標高 18.3 mで、やや東側へ検出面は傾斜している。側溝の芯心間の距離は 6.3 mである。削平を大きく受けているため、側溝の残存も悪い。

ベルト①

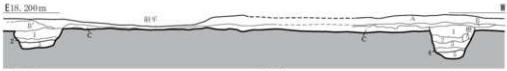
（東側溝）
1　10YR2/1 黒色シルト
2　10YR7/6 明褐色粘質土

ベルト②

（東側溝）
1　2.5Y2/1 黒色シルト
2　7.5YR1.7/1 黒色シルト＋10YR6/6 明黄褐色土が斑点状
3　2.5Y2/1 黒色シルト＋10YR6/6 明黄褐色土が斑点状
4　10YR2/2 黒褐色シルト

（西側溝）
1　10YR2/2 黒褐色シルト
2　10YR2/1 黒色シルト
3　10YR2/2 黒褐色シルト＋2.5YR/4 淡黄色土が斑点状
4　10YR2/1 黒色粘質土＋2.5Y7/6 明黄褐色土ブロック含む

ベルト③（調査区南壁）



（東側溝）
1　7.5YR1.7/1 黒色シルト
2　2.5Y2/1 黒色土シルト＋7.5YR1.7/1 黒色シルト
　＋10YR4/4 褐色粘質土ブロック
3　7.5YR1.7/1 黒色シルト＋2.5Y2/1 黒色シルト
　＋2.5Y5/4 黄褐色粘質土

（西側溝）
1　7.5YR1.7/1 黒色シルト
　＋10YR5/4 に赤い黄褐色土小ブロック斑点状
2　10YR2/1 黒色シルト
4　10YR1.7/1 黒色シルト
5　10YR4/4 褐色土（砂質土）＋10YR5/6 黄褐色土（粘質土）
　＋10YR2/2 黒褐色シルト

A　10YR2/2 黒褐色土シルト（砂利多く含む，黒ビニール入り）
B　10YR3/2 黒褐色シルト（7 mm以下の砂利含む）
B'　10YR2/2 黒色シルト
　＋10YR5/4 に赤い黄褐色土小ブロック斑点状
C　10YR5/3 に赤い黄褐色粘質土＋10YR3/2 黒色粘質土が斑点状に入る

ベルト④

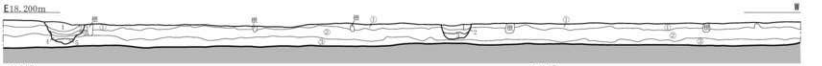
（東側溝）
1　10YR2/1 黒色粘質土
2　10YR2/2 黒褐色粘質土
3　10YR3/2 黒褐色粘質土
4　10YR3/2 黒褐色粘質土に 2.5Y6/3 に赤い黄色，5/4 黄褐色粘質土が混じる
5　2.5Y6/3 に赤い黄色，5/4 黄褐色粘質土

（西側溝）
1　10YR1.7/1 黒色粘質土
2　10YR2/1 黒色粘質土
3　茶褐色粘質土
4　10YR1.7/1 黒色粘質土
5　2.5Y5/4，5/3 黄褐色極細粒砂に 10Y2/1 黒色粘質土が混じる

第3図　道路状遺構側溝断面実測図１［ベルト①～④］（s＝1/60）

ベルト⑤

E18.200m



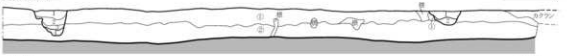
（東側面）
1　10YR3/1 黒褐色シルト
2　10YR2/1 黒色シルト
3　10YR1.8/1 黒色シルト
4　10YR2/1 黒色シルト
5　10YR3/2 黒褐色粘質土
　＋10YR5/4 にぶい黄褐色粘砂ブロックを含む

①　10YR3/2 黒褐色粘質土＋10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土
②　10YR5/3 にぶい黄褐色土（粘質土）＋10YR3/2 黒褐色土（粘質土）
　＋明黄褐色土の極細粒砂含む
③　10YR5/4 にぶい黄褐色土（粘砂質土）
　＋10YR5/6 黄褐色土（粘質土）が上方に入る

（西側面）
1　10YR1.8/1 黒色シルト
2　10YR2/1 黒色シルト
3　10YR2/1 黒色シルト
　＋10YR5/3 にぶい黄褐色土が 10YR5/6 黄褐色粘質土（斑点状）に入る

ベルト⑥

E18.400m



（東側面）
1　10YR1.7/1 黒色シルト
2　10YR1.7/1・2/1 黒色シルト
3　10YR2/1 黒色シルト
4　10YR2/1 黒色シルト＋2.5Y6/3 にぶい黄橙細粒砂含む
　＋10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土ブロック含む

①　10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土＋10YR3/2 黒色粘質土
②　10YR5/4 にぶい黄褐色土（粘砂質土）＋10YR5/6 黄褐色土（上方）
　＋2.5Y7/4 浅黄色砂質土（下方）

（西側面）
1　10YR1.7/1 黒色シルト＋10YR5/4 にぶい黄褐色土が斑点状
2　10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土＋10YR1.7/1 黒色土が斑点状に入る

ベルト⑦

E18.600m

（東側面）
1　10YR3/1 黒褐色シルト
2　2.5YR5/4 黄褐色粘質土＋10YR3/1 黒褐色土

（西側面）
1　10YR1.2/2 黒褐色シルト
2　10YR4/2 灰黄褐色粘質土＋黒褐色土 10YR2/2 まだらに入る
3　2.5Y8/4 黒色粘質土＋10YR3/1 黒褐色土

ベルト⑧

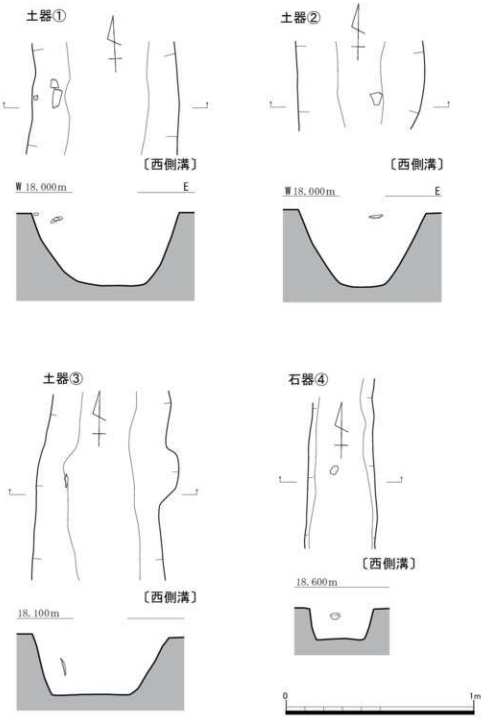
E19.000m

（東側面）
1　10YR2/1 黒色シルト
2　10YR3/2 黒褐色粘質シルト
3　10YR2/1 黒色粘質シルト＋3 cm大の 2.5YR7/6 明黄褐色粘質土ブロック含む
4　2～5 cm大の 10YR5/3 黒黄褐色粘質土ブロックに黒色土少量含む

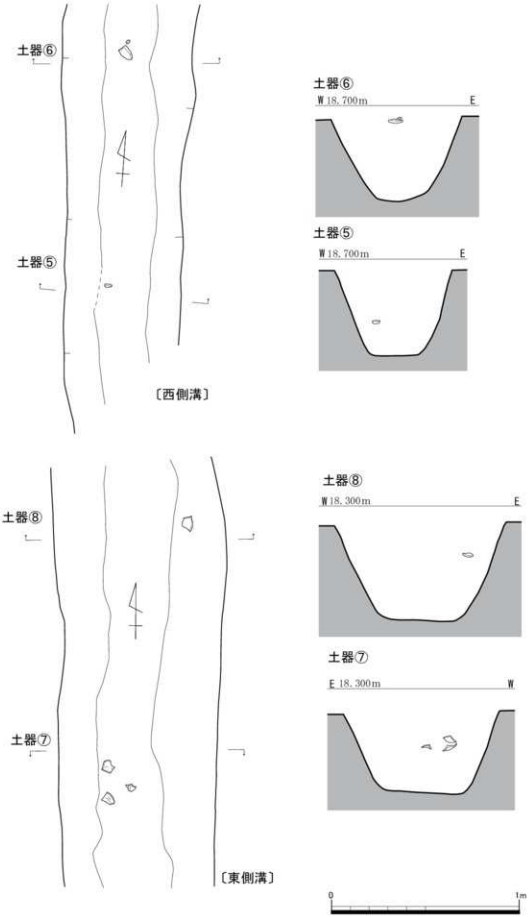
（西側面）
1　10YR3/3 暗褐色土（明黄褐色粒含む）
2　10YR3/1 黒褐色土（明黄褐色粒含む）
3　10YR3/3 暗褐色シルト（明黄褐色粒含む）
4　10YR3/2 黒褐色土（黄褐色粘土ブロック含む）
5　10YR3/2 黒褐色土（10YR4/6 褐色粘土ブロック大含む）

0　2m

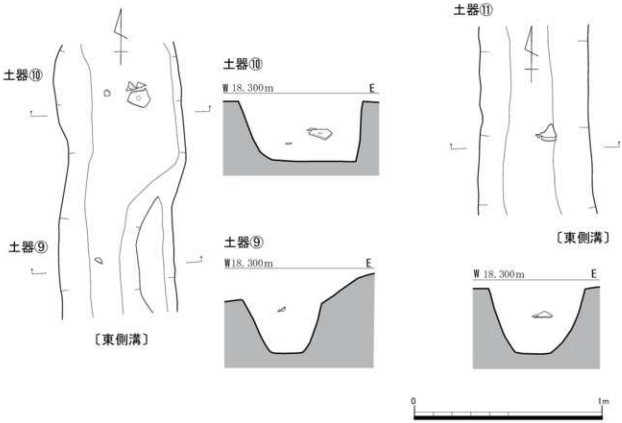
第４図　道路状遺構断面実測図２［ベルト⑤～⑧］（s＝1/60）



第５図　道路状遺構側溝遺物出土状況実測図［土器①～③、石器④］（s＝1/40）



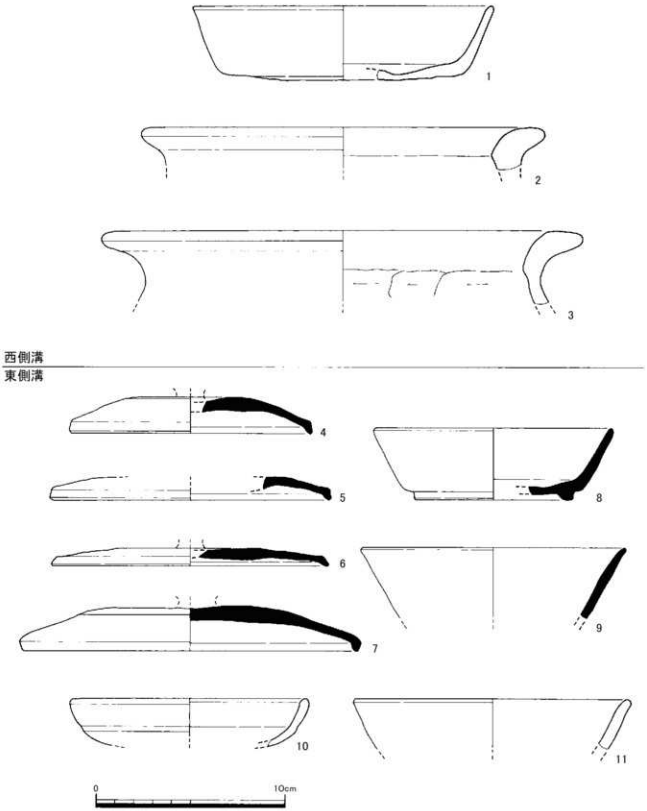
第６図　道路状遺構側溝遺物出土状況実測図［土器⑤～⑧］（s＝1/40）



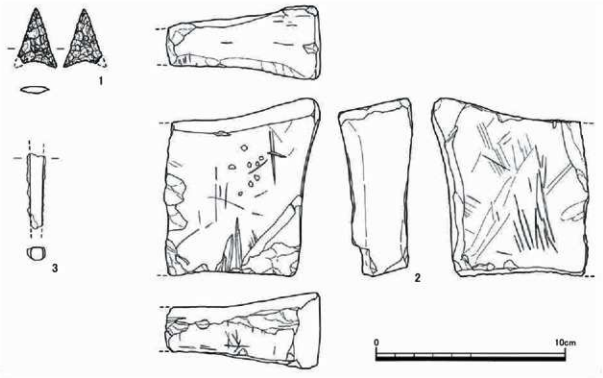
第７図　道路状遺構側溝遺物出土状況実測図［土器⑨～⑪］（s＝1/40）

［西側溝］
溝掘り込み時の最終底面まで掘削している。上端幅 28cm、底面幅 26cm、使用時の底面までの深さ 11cmを測る。溝の断面はＵ字形である。埋土は黒褐色シルトを主体とする。底面から 9cmの厚さで灰黄褐色粘質土ブロックを含む溝施工時の均し土がみられる。使用時の底面の標高は 18.21 m、掘り込み時の底面の標高は 18.3 mである。
［東側溝］
溝掘り込み時の最終底面まで掘削している。上端幅 42cm、底面幅 36cm、使用時の底面までの深さ 5cmを測る。溝の断面はＵ字形である。埋土は黒褐色シルトを主体とする。底面から 11cmの厚さで、黄褐色粘質土ブロックを含む溝施工時の均し土がみられる。使用時の底面の標高は 18.3 m、掘り込み時の底面の標高は 18.41 mである。

ベルト⑧（付図、第４図）
調査区北壁から南へ約 13 m地点での土層観察である。道路状遺構検出面は西側で標高 18.61 m、東側で 18.31 mと東側に傾斜している。側溝の芯心間の距離は 6.12 mである。
［西側溝］
溝掘り込み時の最終底面まで掘削している。上端幅 69cm、底面幅 24cm、使用時の底面までの深さ 21cmを測る。溝の断面は上層でラッパ状に大きく開く。埋土は暗褐色～黒褐色粘質土を主体とする。底面から 6cmの厚さで褐色粘質土ブロックを含む溝施工時の均し土がみられる。使用時の底面の標高は 18.37 m、掘り込み時の底面の標高は 18.31 mである。
［東側溝］
溝掘り込み時の最終底面まで掘削している。上端幅 66cm、底面幅 30cm、使用時の底面までの深さ 15cmを測る。溝の断面は上層でラッパ状に大きく開く。埋土は黒色シルトを主体とする。底面から 9cmの厚さで、明黄褐色粘質土ブロックを含む溝施工時の均し土がみられる。使用時の底面の標高は 18.16 m、掘り込み時の底面の標高は 18.27 mである。



第８図　道路状遺構側溝出土土器実測図（ｓ＝１／２）



第９図　松崎六本松遺跡４出土石器・鉄器実測図（ｓ＝１／２）

出土遺物（第８図）

出土遺物は少なく、出来るだけ出土状況を把握することに努めた。西側溝は特に出土遺物が少ない。

［西側溝］

西側溝下層［北部ﾍﾞﾙ⑤付近］からは土師器坏（第８図１）が出土した。底部は回転ヘラ切り後ナデており、口縁部にかけて直線的に開きを持ち立ち上がる。土師器甕口縁部（２）は出土状況図の土器⑥（第６図）にあたり、溝中央最上層からの出土である。残存は悪く、肥厚する短い口縁部が確認できるのみである。土師器甕口縁部（３）は出土状況図の土器①（第５図）にあたり、溝西肩最上層付近の出土である。残存は悪いがやや肥厚して緩やかに屈曲してのびる口縁部で、体部口縁部下にはケズリが明瞭に確認できる。

他に、土師器甕体部片が数点出土している（出土状況図土器②③：第５図）、（出土状況図土器⑤：第６図）。いずれも細片のため図化していない。円礫（出土状況図石器④：第５図）も出土した。

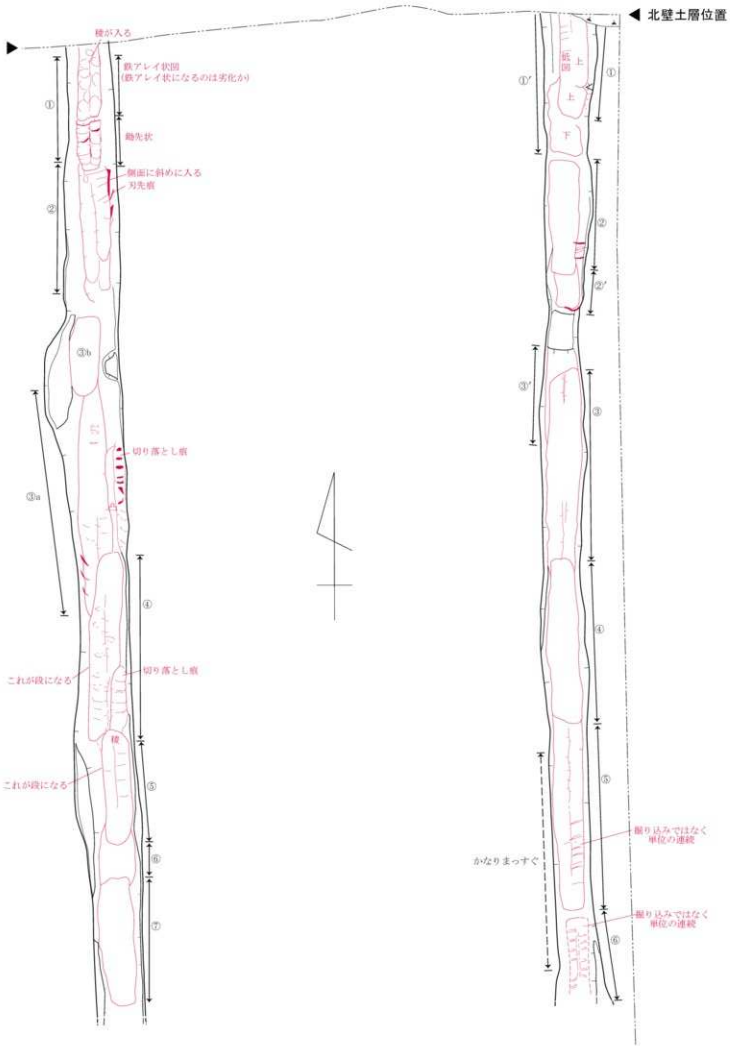
［東側溝］

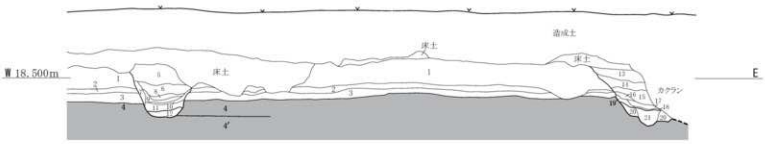
東側溝からは口縁端部が折れ曲がり三角形状を呈する須恵器蓋（第８図４～７）、須恵器高台付坏（８）、須恵器坏口縁部（９）、土師器坏口縁部（10・11）、が出土した。須恵器蓋（４・６・７）は、つまみ部分が剥落もしくはその部分で欠けている。

出土状況図土器⑦では須恵器片３点（4・6・8）が近い位置で出土した。溝中層からの出土である。出土状況図土器⑧土師器甕胴部片で、溝東肩付近、中層から上層にかけての出土である。出土状況図土器⑨では須恵器坏口縁部（９）が出土した。直線的に開く口縁部で回転ナデがみられる。溝の中央部上層からの出土である。出土状況図⑩では溝中層から須恵器蓋（７）須恵器甕胴部片、陶器擂鉢口縁部片が出土した。周辺には攪乱が及んであり、擂鉢の出土を考えると中層付近まで出土状況にも影響している可能性がある。出土状況図⑪では溝中央付近、中層から土師器甕底部片が出土した。

須恵器蓋（５）、土師器坏口縁部（10・11）は上層からの出土である。

東側溝最上層からは、鉄鏃茎部（第９図３）が出土した。残存長3.9㎝、幅0.7㎝、厚さ0.7㎝、重さ3.6ｇである。





1　10YR2/1 黒色シルト
2　10YR3/4 暗褐色シルト（火山ガラス含む）
3　10YR3/1 黒褐色粘質シルト
4　10YR6/4 にぶい黄橙粘質土（均質）
4'　中央トレンチにあるようなブロックを含む攪拌層へ移行

【北壁土層】

（西側面）
5　10YR3/2 黒褐色粘質シルト
6　5＋10YR4/1 褐色ブロックの互層状
7　10YR4/1 褐灰色粘質シルト
8　少しクロ味 10YR3/1 クロ褐色シルト
9　10YR3/2 黒褐色、ラミナ含む
10　10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト
11　10YR3/1 黒褐色シルトブロック＋1cm大以下の 10YR4/2 灰黄褐色粘土ブロック
12　1～5cm大の 10YR4/2 灰黄褐色粘土ブロックを多く含む

（東側面）
13　10YR3/1 黒褐色シルト
14　10YR3/2 黒褐色シルト
15　10YR3/3 黒褐色シルト
16　第13層と同じ
17　10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト（ラミナ状）
18　10YR3/2 灰黄褐色粘質シルト
19　10YR4/2 灰黄褐色粘質ブロック＋黒色土少し
20　クロ小＋10YR5/3 にぶい黄褐色ブロック大
21　10YR2/2 黒褐色シルト＋10YR5/3 にぶい黄褐色ブロック大
＝2.5YR/4 浅黄粘土ブロック少量

0　2m

第10図　道路状遺構［北部］実測図（s＝1/50）

（2）溝状遺構

1号溝（付図）

Ⅱ区中央で検出した北東―南西方向の溝である。その延長は調査区外に及ぶ。道路状遺構東西の素行を切り、4号溝に切られている。北側は標高18.2 m付近で検出した。幅1 m、深さ25㎝程度を測る。埋土は黒褐色を呈する。

2号溝（付図）

Ⅱ区南側で検出した北西―南東方向に延びる溝である。Ⅰ区2号溝の延長にあたり、3号溝と併行して走る。道路状遺構東西の側溝を切る。標高18.1 mで検出した。幅30～60㎝、深さ5㎝程度を測る。埋土は黒褐色を呈する。

3号溝（付図）

Ⅱ区南側で検出した北西―南東方向に延びる溝である。道路状遺構東西の側溝を切り、1号土坑に切られる。Ⅰ区3号溝の延長にあたり、2号溝と併行して走る。標高18.1 mで検出した。幅80㎝、深さ30～40㎝程度を測る。埋土は黒褐色を呈し、近世以降の陶磁器片を含む。

4号溝（付図）

Ⅱ区中央で検出した北北西―南南東方向に延びる溝である。1号溝、5号溝、道路状遺構東側溝を切る。その南東方向の延長は調査区外に及ぶがⅠ区ではその延長は確認できない。標高18.4 mで検出した。幅80㎝、深さ20㎝程度を測る。埋土は黒褐色を呈する。

5号溝（付図）

Ⅱ区中央で検出した北北西―南南東方向に延びる溝である。4号溝に切られている。標高18.4 mで検出した。検出長8.8 m、幅40～50㎝、深さ5～10㎝程度を測る。埋土は黒褐色を呈する。

6号溝（付図）

Ⅱ区中央東端で検出した北東―南西方向に延びる溝である。道路状遺構東側溝を切る。標高18.4 mで検出した。幅50㎝、深さ10㎝程度を測る。埋土は黒褐色を呈する。

7号溝（付図）

Ⅱ区北側で検出した北西―南東方向に延びる溝である。道路状遺構との直接的な切り合いは不明である。溝底にさらに細い溝状の掘り込みがみられる。標高18.6 mで検出した。幅80～90㎝、深さ15㎝程度を測る。埋土は黒褐色を呈する。

（3）そのほかの出土遺物（第9図）

北壁の火山灰を含む層の下層から黒色緻密質安山岩製凹基式打製石鏃（第9図1）が出土した。左基端を欠損する。長さ3.2㎝、残存幅2.1㎝、厚さ0.4㎝、重量1.7 gである。

Ⅱ区表採品で砂岩製砥石（第9図2）が出土した。5面の使用が確認できる。長さ9.4㎝、幅8.1㎝、厚さ3.9㎝、重さ320 gである。

第４章　調査成果の分析

１．これまでの調査成果

松崎六本松遺跡ではこれまでに４次の調査が行われている（山崎 2004、柏原 2009、西江 2020、本書）。１・２次調査において、筑後平野を東西方向に走る官道（幅約６ｍの直線道）を、３・４次調査において、南北方向に走り下高橋官衙遺跡と先の東西官道を接続する官道（幅約６ｍの直線道）を確認している（第 11 図）（註１）。

１・２次調査では座標東西（Ｙ座標）を基準にした場合、ほぼ東西方向で伸びている。３・４次調査では座標北（Ｘ座標）を基準にした場合、3°西に振っている。そもそも、「真北」と「座標北」は違いがあり、子午線の西側に位置する九州では、真北はわずかに東に偏っている。１・２次調査の東西官道と３・４次調査の南北官道の座標でのずれは３°程度である。

南北官道は下高橋官衙遺跡の西側正倉院の基準方位（ほぼ正方位）に近く、東側の郡庁・曹司院の基準方位（6°東に振る）とは異なるといえる。

２．道路の構造

松崎六本松遺跡でみられる道路状遺構の路面は、削平を受けており調査では確認できていない。六本松遺跡４の調査では、耕作土・床土までを機械掘削している。北壁では、現況地盤から 70cm 下まで造成土が確認でき、その下層に床土がみられた（第 10 図）。もともとは水田や畑に使用されていた土地が造成され耕作土が削平され、客土がみられる。

調査区中央北寄りでは地形が高くなっており、側溝が途切れる箇所がみられる（付図）。その部分を頂点として、南側には地形が緩やかに下り、北側では比較的傾斜を持って下るため、中央から北側では旧表土の堆積が残存している。調査区南端から北へ 60 m付近で検出面（黄褐色ローム土）の標高が 18.6 mと高くなっており、南端では 17.9 m、北端では 18.2m と下がっていく様子がうかがえる。

六本松遺跡４北壁の観察では、本来の遺構面は黄褐色ローム土の上に３層分堆積があり、その最上層の旧表土である黒色シルトの上面から道路側溝が掘削されていることが分かる（第 10 図）。今後、周辺の調査を行う際には、旧表土上面での検出に注意しなければならない。黒色シルトは均質なシルト層で、旧表土と考えられ、人為的な路盤（路体）とは考えられない。人為的な道路造成に伴う層は存在するならば、この黒色シルトの上位に相当するだろう。

旧表土以下には火山ｶﾞﾗｽを含む暗褐色土（アカホヤの可能性）がみられ、その下層に黒褐色粘質土、にぶい黄橙色粘質土がみられた。

調査区の南半分では、松崎六本松遺跡１・２でも見られた、基盤となる下位の淡黄褐色粘質土の上位にブロック土混入の灰黄褐色土が形成されている。層準的には旧表土（黒色シルト）の下層に相当すると考えられ、やや低湿な状況で植物等によって撹拌された状況なのであろうか。北壁の火山ｶﾞﾗｽを含む暗褐色土が撹拌された状況とも考えられる。この灰黄褐色土は道路造成時の整地層であることも考慮してトレンチ等を設定したが（第４図）、松崎六本松遺跡２次調査で確認した道路側溝に切られた風倒木痕と灰黄褐色土との関係から、灰黄褐色土の堆積後に倒木痕の形成、道路側溝の掘削という大きな変遷が確認されている。今回の調査でも、直接的ではないが、北壁土層観察の結果とあわせて、道路側溝とは関係のない堆積層であることが考えられた。

側溝は北壁の土層断面で確認すると、上位で大きく広がりを持つように逆台形状を呈するといえる。特に、東側溝では壁の立ち上がりが緩く大きく開いている。平面形では、詳細に見ると、直線ではなく、緩やかな屈折が連続して観察できる。いくつかの掘削単位が確認できるが、たとえば北部では、西側溝は大きな単位として、①～⑦の単位、東側溝は大きな単位として①～⑥の単位がみられた（第 10 図）。これらには切り合いがみられ、作業単位には先後関係がある。

数メートル単位の溝状土坑を掘り込んで最終的に連結して一つの溝としている。一旦深く掘削した後に、溝底を均一にならすために、黄褐色粘土ブロックを含む層で埋めている。竪穴住居でいう貼床状の土が堆積している部分がある。なお、今回調査した道路状遺構の北側 10 m分の東西

側溝は最終底面（溝掘り込み時の底面）までの掘削は行わずに、溝使用時の底面までの掘削に留めた。同様にⅡ区の南側拡張区の調査も溝使用時の底面までの掘削としている。調査区北側の地形が低い部分ではラミナ堆積も見られるので、一時期は側溝に水が流れ込んでいる状況が窺えた（図版 11）。

3．道路の施工から廃絶へ

松崎六本松遺跡の各調査成果を再点検すると、いずれも両側溝の最下層に黄褐色粘土ブロックを含む層が存在し（第３・４図）、松崎六本松遺跡４の調査成果から人為的に溝底面を均したものと考えるに至った。松崎六本松遺跡１次調査は道路状遺構の検出と部分的にトレンチ調査を行ったが、写真で確認すると溝底面で黄褐色ブロック土を含む層が確認できるので、これが地山ではなくて、均し土の可能性が考えられる。北側溝の８層以下、南側溝 15 層以下に溝底を均す人為的な埋土が見られる可能性を考えている（第 11 図）。同様に、松崎六本松遺跡２の北側溝４層以下、南側溝５層、松崎六本松遺跡３の東側溝３層、西側溝３層が均し土である可能性が考えられる（第 11 図）。松崎六本松遺跡４では東側溝の５層、西側溝の３層が均し土である（第 11 図）。

松崎六本松遺跡では、このような所作が１次～４次調査まで確認できることから、東西路線、南北路線共に共通した施行方法を採っていることがうかがえる。

次に、掘り直しについては、松崎六本松遺跡２次調査では北側側溝、南側溝ともに部分的に溝の中段にテラス部を持つ箇所がある。土層断面図を見ると、いずれも、掘り直しと考えられる堆積状況とみる。松崎六本松遺跡３次調査ではＣ区土層断面で掘り直しと考えられる堆積状況が確認できる。松崎六本松遺跡４次調査でも、掘り直しが想定され、北壁土層では、両側溝に掘り直しと考えられる堆積状況がみられる。東側溝では溝さらえと掘り直しがみられ、西側溝では掘り直しがみられる。

以上のことから、部分的であっても、道路維持のために側溝の掘り直しが認められる。溝の掘り直しは見られるが、大きな幅員の変更は行わずに道路を維持している。

次に、出土土器からうかがえる道路施行から廃絶の時期である。

東西官道である松崎六本松遺跡２では、北側溝より７世紀後半から８世紀前半までの土師器甕破片が出土している。検出状況では溝上位からの出土であるが、遺構の削平を考えると本来の溝の中位からの出土とも考えられる。

南北官道である松崎六本松遺跡３の出土土器の時期については、その所属時期比定がやや古くなされており、再検討が必要である（西江 2020）。出土遺物は東側側溝からの出土が多く、８世紀前半から後半の所産と考える。削平を大きく受けており、溝の残存も悪いので下層からの出土と考えられようか。松崎六本松遺跡４では、西側溝から土師器坏８世紀前半、土師器甕口縁部８世紀前半、東側溝から８世紀代前半の須恵器蓋、８世紀前半から後半の坏、８世紀後半の土師器坏などが出土している。

出土遺物自体が大変少なく、先後関係を示す遺構の検出も少ないことから、その施行時期、機能時期、廃絶時期の詳細を測ることは難しいが、８世紀代に側溝が機能していることは言えるだろう。

4．御原郡の都市計画のなかで

調査の蓄積により、御原郡内を東西、南北に走る幅６ｍの直線道の存在が明らかにされつつある。これらは、御原郡内の官衙関連遺跡を結び、郡衙間を結ぶ伝路である。東西官道は既に片岡宏二により、御原郡内の条里制地割と合致することが指摘されている（片岡 2008）。小郡官衙遺跡第Ⅲ期は御原郡の三条七甲（里）に位置し、Ⅲ期北方区画は特に条里地割と整合が認められる。また、井上廃寺の南門位置も条里地割と整合し、小郡官衙を含めた諸施設が条里規格のもとに定められたと考えられる。下高橋官衙遺跡、筑後平野東西官道から南へ分岐する南北官道も条里地割との整合が認められそうだ。条里復元も含めた今後の課題である。

一方で、上岩田遺跡では既に多くの道路状遺構が確認されており、なかでも４号溝は北東方向

からやや弧を描きながら西へ連なる２条の併行する溝（幅約６ｍ）によってつくられている（柏原・山崎 2014）。この溝はＡ区１・２・３期の遺構に先行することから、およその時期は７世紀第３四半期以前ということがいえる。御原郡内の直線道路設定以前、７世紀中頃以前の比較的古い道路状遺構と言え、その方向は小郡官衙遺跡へ到達すると考えられる（木本 2009）。

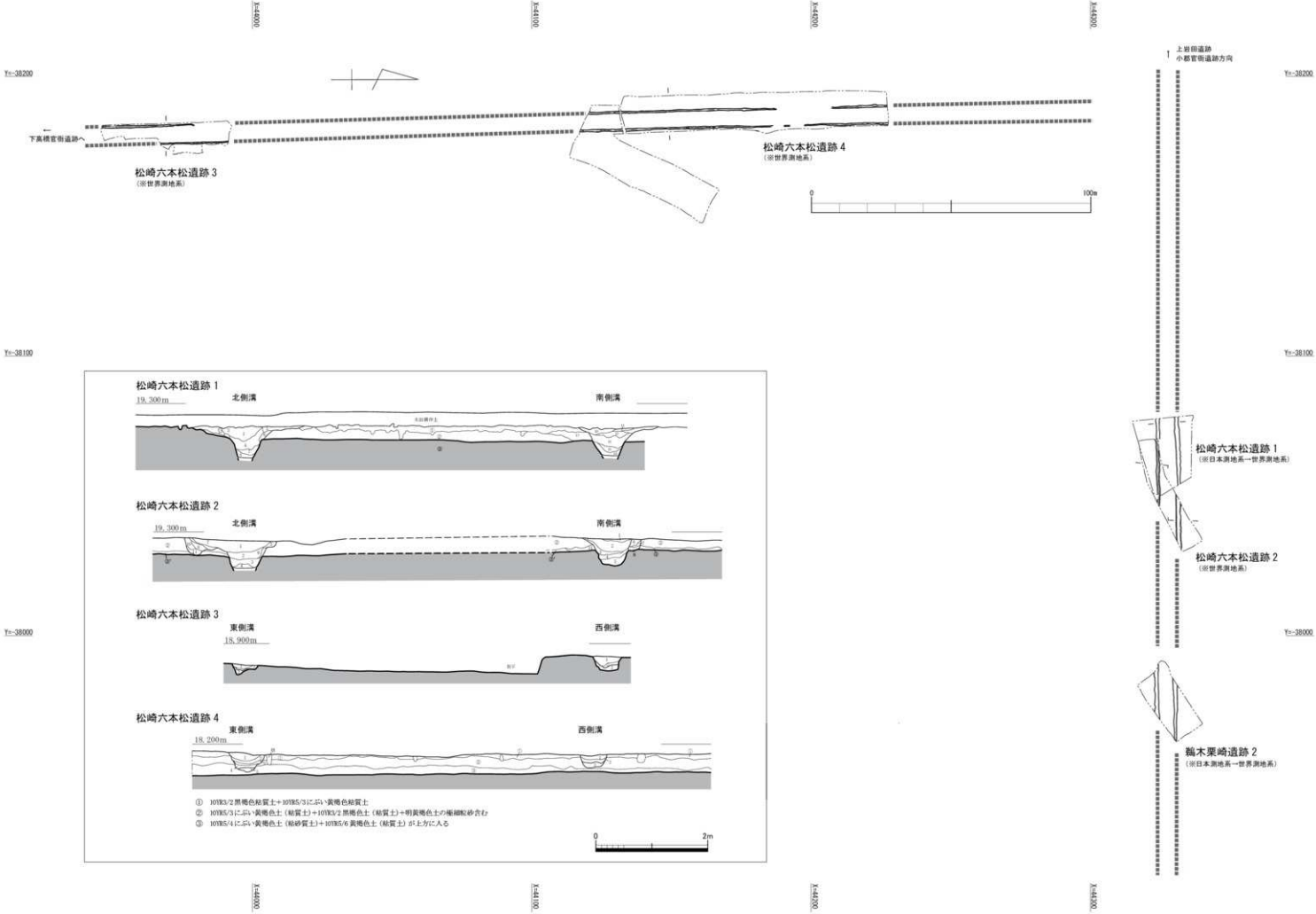
御原郡の郡界と筑後・肥前国境の直線的な境界を論じた木本雅康は、天智朝に直線的な駅路が付設され、天武朝にその一部が筑紫・肥前の国境に踏襲され、郡界の画定、条里の設定が行われていることを示した（木本 2009）。御原郡の成立・条里の設定と軌を一にして、直線的な東西官道が計画され、南北の官道は、東西官道から枝分かれして下高橋官衙遺跡に通ずるルートで下高橋官衙遺跡の成立と大きく関わるものと考えられる。

これらの官道の整備・維持が実際にどのように行われたのか、今後、発掘調査の成果からも明らかにしなければならない課題は多い。

（註１）それら官道の合成図面を作成したが、日本測地系から世界測地系へ変換した松崎六本松遺跡１、および大刀洗町鵜木栗崎遺跡２（赤川 2021）では若干ずれが生じたが、松崎六本松遺跡２の調査成果と整合をとるようにした。松崎六本松遺跡１、鵜木栗崎遺跡２は確認調査で検出のみであることにも起因しているかもしれない。

文献

山崎頼人 2004「松崎六本松遺跡」『埋蔵文化財調査報告書４』小郡市文化財調査報告書第 188 集　小郡市教育委員会
片岡宏二 2008「小郡官衙遺跡（福岡県小郡市）の再検討」『条里制･古代都市研究』第 23 号　条里制･古代都市研究会
木本雅康 2009「筑後国御原郡の郡界と筑後・肥前国境について」『古代地方行政単位の成立と在地社会』奈良文化財研究
柏原孝俊 2009『松崎六本松遺跡２』小郡市文化財調査報告書第 246 集　小郡市教育委員会
西江幸子 2020『松崎六本松遺跡３』小郡市文化財調査報告書第 331 集　小郡市教育委員会
柏原孝俊・山崎頼人編 2014『上岩田遺跡Ⅴ』小郡市文化財調査報告書第 277 集　小郡市教育委員会
赤川正秀 2021「鵜木栗崎遺跡２」『大刀洗町内遺跡３』大刀洗町文化財調査報告書第 68 集　大刀洗町教育委員会



第 11 図　松崎六本松遺跡１～４合成図（ｓ＝1/ 1,200）

第1表　松崎六本松遺跡4　出土遺物観察表

法量＝口:口径、高:器高、底:底径、天:天井部径
器種＝須:須恵器　土:土師器

挿図番号	図版番号	出土遺構		器種	法量cm・（復元値）	色調	胎土	焼成	成形・調整方法	備考
第8図1	14	西側溝	北部上層	土・坏	口:(15.8) 底:(11.6) 高:3.9	内:明黄褐色 外:明黄褐色～橙	良 径1mm程度の細砂粒を含む	良	口・内外:回転ナデ　底・内:不定ナデ 底・外:回転ヘラ切り後ナデ	
第8図2	14	西側溝	土器⑥	土・甕	口:(21.3) 残存高:2.2	内:橙～明褐色 外:橙色	粗 径1～2mm程度の細砂粒を含む	良	口・内外:ヨコナデ　胴・内上半:ケズリ	
第8図3	14	西側溝	土器①	土・甕	口:(25.4) 残存高:3.7	内:灰白～浅黄橙色　外:にぶい黄橙～橙色	粗 径1～2mm程度の細砂粒を含む	良	口・内外:ヨコナデ　胴・内上半:ケズリ	
第8図4	14	東側溝	土器⑦	須・蓋	口:(12.8) 残存高:1.9	内:褐灰色 外:褐灰色	精良 径1mm以下の砂粒をわずかに含む	良	口・内外:ヨコナデ 天井・内:不定方向ナデ 天井・外:回転ヘラ切り	つまみ部剥落
第8図5	14	東側溝	中央部上層	須・蓋	口:(14.8) 残存高:1.2	内:褐灰色 外:黄灰色	精良	良	口・内外:ヨコナデ	
第8図6	14	東側溝	土器⑦	須・蓋	口:(14.6) 残存高:0.95	内:黄灰色 外:褐灰色	精良 径1mm以下の砂粒をわずかに含む	良	口・内外:回転ナデ 天井・内:不定方向ナデ 天井・外:回転ヘラ切り	つまみ部剥落
第8図7	14	東側溝	土器⑩	須・蓋	口:(18.0) 残存高:2.3	内:にぶい褐～褐灰色 外:褐灰色	精良 径1～2mm以下の砂粒をわずかに含む	やや良	口・内外:ヨコナデ　天井・内:不定方向ナデ　天井・外:回転ヘラ切り	つまみ部剥落
第8図8	14	東側溝	土器⑦	須・坏	口:(12.7) 残存高:3.8	内:灰色 外:灰白色	精良	良	口・内外:回転ナデ　底・内:不定方向ナデ　高台・外接合ナデ 高台・内外:回転ヘラ切り	
第8図9	14	東側溝	土器⑤	須・坏	口:(14.0) 残存高:3.8	内:灰黄褐色 外:褐灰色	精良	良	口:ヨコナデ	
第8図10	14	東側溝	上層	土・坏	口:(12.6) 残存高:2.5	内:橙色 外:橙色	良 径1mm以下の砂粒を含む	良	磨滅により調整不明	
第8図11	14	東側溝	上層	土・坏	口:(14.6) 残存高:2.6	内:橙色 外:橙色	精良 径1mm以下の砂粒をわずかに含む	良	口:ヨコナデ	

図　　版

松崎六本松遺跡４全景（南上空から花立山・宝満山方向）

図版 1

①松崎六本松遺跡 4 調査区全景（東上空から基肄城・背振山系方向）

②松崎六本松遺跡 4 調査区全景（北上空から下高橋官衙遺跡・高良山方向）

①松崎六本松遺跡４調査区全景（真上から）

②松崎六本松遺跡４調査区（南東上空から）

図版３

①松崎六本松遺跡４官道検出状況（真上から）

②松崎六本松遺跡４官道検出状況（北東上空から）

①松崎六本松遺跡 4 官道検出状況（南上空から）

②松崎六本松遺跡 4 官道検出状況（北上空から）

図版５

①Ⅰ区調査区全景（南西から）

②Ⅰ区調査区全景（北東から）

③Ⅰ区南壁 SD01 土層断面（北東から）

④Ⅰ区 SD02・03 掘削状況（北西から）

⑤Ⅰ区 SD04・05 出土状況（東から）

⑥Ⅰ区 SD06 土層断面（北から）

⑦Ⅰ区南壁官道東側溝土層断面（北から）

⑧Ⅰ区官道東側溝（ベルト①）土層断面（南から）

①官道掘削状況［ベルト①～ベルト③付近］（北から）

②官道西側溝土層断面［ベルト②］（南から）

③官道東側溝土層断面［ベルト②］（南から）

④官道西側溝土層断面［ベルト③］（北から）

⑤官道東側溝土層断面［ベルト③］（北から）

図版 7

①官道掘削状況［ベルト④⑤付近］（北から）

②官道西側溝土層断面［ベルト④］（北から）

③官道東側溝土層断面［ベルト④］（北から）

④官道西側溝土層断面［ベルト⑤］（北から）

⑤官道東側溝土層断面［ベルト⑤］（北から）

①官道掘削状況［ベルト⑥付近］（北から）

②官道土層断面［ベルト⑥トレンチ］（北から）

③官道土層断面［ベルト⑥トレンチ］（北から）

④官道西側溝土層断面［ベルト⑥］（北から）

⑤官道東側溝土層断面［ベルト⑥］（北から）

図版 9

①官道掘削状況［ベルト⑥⑦付近］（北から）

②官道西側溝土層断面［ベルト⑦］（南から）

③官道東側溝土層断面［ベルト⑦］（南から）

④官道西側溝土層断面［ベルト⑧］（南から）

⑤官道東側溝土層断面［ベルト⑧］（南から）

①官道北壁土層断面（南から）

②官道北壁土層断面（南西から）

図版 11

①宮道西側溝土層断面［北部］（南東から）

②宮道西側溝土層断面［北部］（東から）

③宮道東側溝土層断面［北部］（南西から）

④宮道東側溝土層断面［北部］（西から）

⑤宮道西側溝土層断面［北壁］（南から）

⑥宮道東側溝土層断面［北壁］（南から）

⑦宮道西側溝使用底面［北部］（北から）

⑧宮道東側溝使用底面［北部］（北から）

①宮道西側溝土層断面［北部］（北東から）

②宮道西側溝土層断面［北部］（東から）

③宮道西側溝土層断面［北部］（北西から）

④宮道西側溝土層断面［北部］（南東から）

⑤宮道東側溝使用底面［北部］（南西から）

⑥宮道東側溝使用底面［北部］（北西から）

⑦宮道東側溝使用底面［北部］（西から）

⑧宮道東側溝使用底面［北部］（東から）

図版 13

①官道西側溝掘削痕［中央部］（真上から）

②官道東側溝掘削痕［中央部］（真上から）

③官道西側溝土器①出土状況（南から）

④官道西側溝土器⑥出土状況（南から）

⑤官道東側溝土器⑦出土状況（北東から）

⑥官道東側溝土器⑦出土状況詳細（東から）

⑦官道東側溝土器⑩出土状況（南東から）

⑧官道東側溝土器⑩出土状況詳細（真上から）

松崎六本松遺跡４出土土器①

松崎六本松遺跡４出土土器②　石器　鉄器

報　告　書　抄　録

ふりがな	まつざきろっぽんまついせき
書名	松崎六本松遺跡４
副書名	
巻次	
シリーズ名	小郡市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 349 集
編著者名	山崎　頼人編　山田　桃子
編集機関	小郡市教育委員会　小郡市埋蔵文化財調査センター
所在位置	〒838-0106　福岡県小郡市三沢 5147-3　℡0942－75－7555
発行年月日	令和４年３月 31 日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（しょざいち）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
松崎（まつざき） 六本松（ろっぽんまつ） 遺跡（いせき）４	福岡県（ふくおかけん） 小郡市（おごおりし） 松崎（まつざき）	40216		33° 23′ 51″	130° 35′ 23″	20201215 ～ 20210326	2,217 ㎡	流通倉庫 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
松崎六本松 遺跡４	道路 官道	奈良	道路状遺構 官道	土師器・須恵器 石器・鉄器	官道の調査

本遺跡はこれまでに３次の調査を実施している。今回検出した官道は、下高橋官衙遺跡から北方向にのびるもので、筑後平野で既に確認されている東西方向の官道と直交する可能性があり、周辺の各官衙を結ぶ官道の様相がさらに明らかとなった。

松崎六本松遺跡４

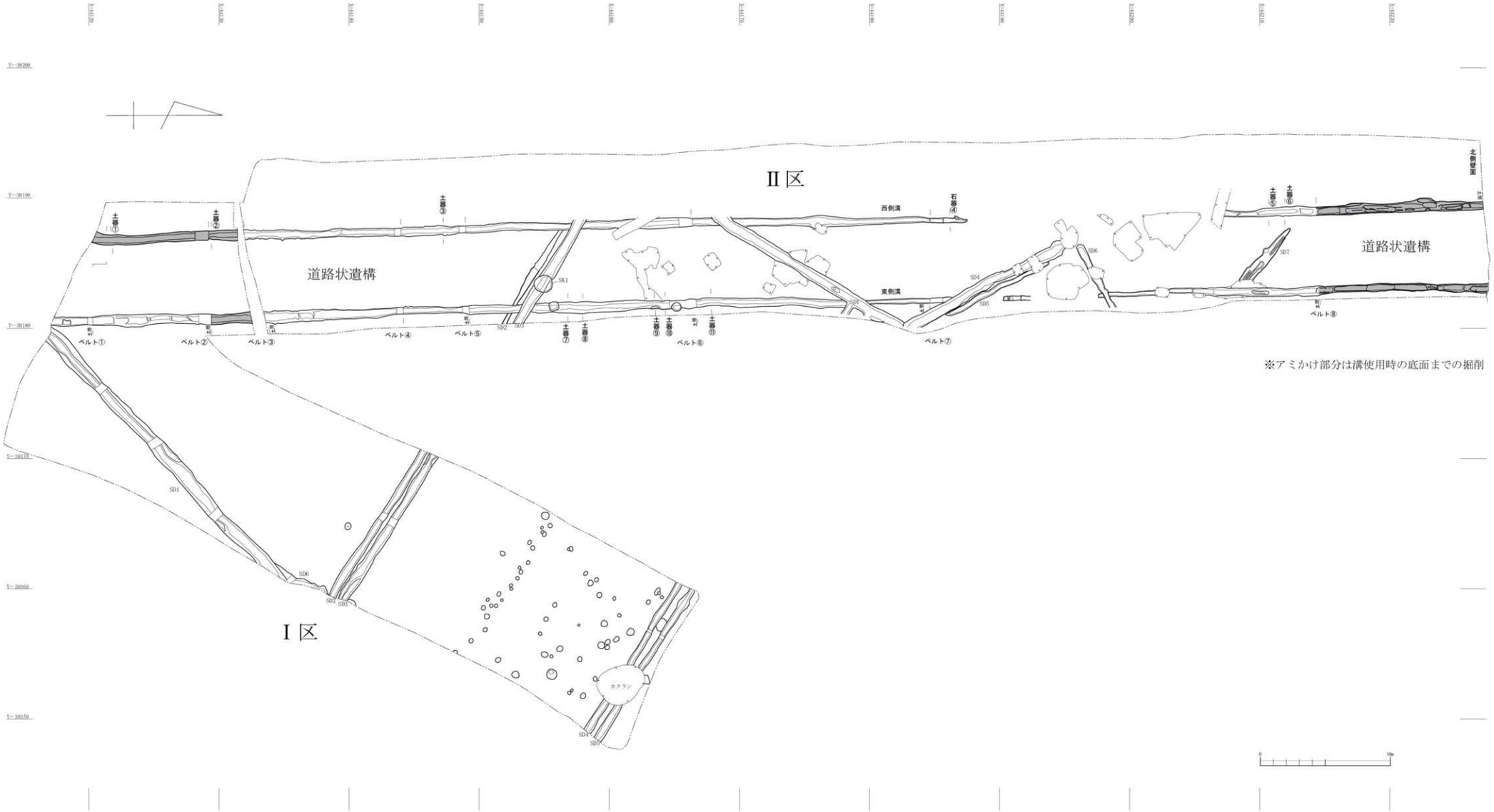
小郡市埋蔵文化財調査報告書第 349 集

令和４年　３月　31 日

発行　小郡市教育委員会

小郡市小郡 255－1

出版　片山印刷（有）



付図　松崎六本松遺跡４全体図（ｓ＝１/200）

松崎六本松遺跡４

小郡市文化財調査報告書第３４９集

２０２２　小郡市教育委員会

松崎六本松遺跡４

小郡市文化財調査報告書第３４９集

２０２２

小郡市教育委員会